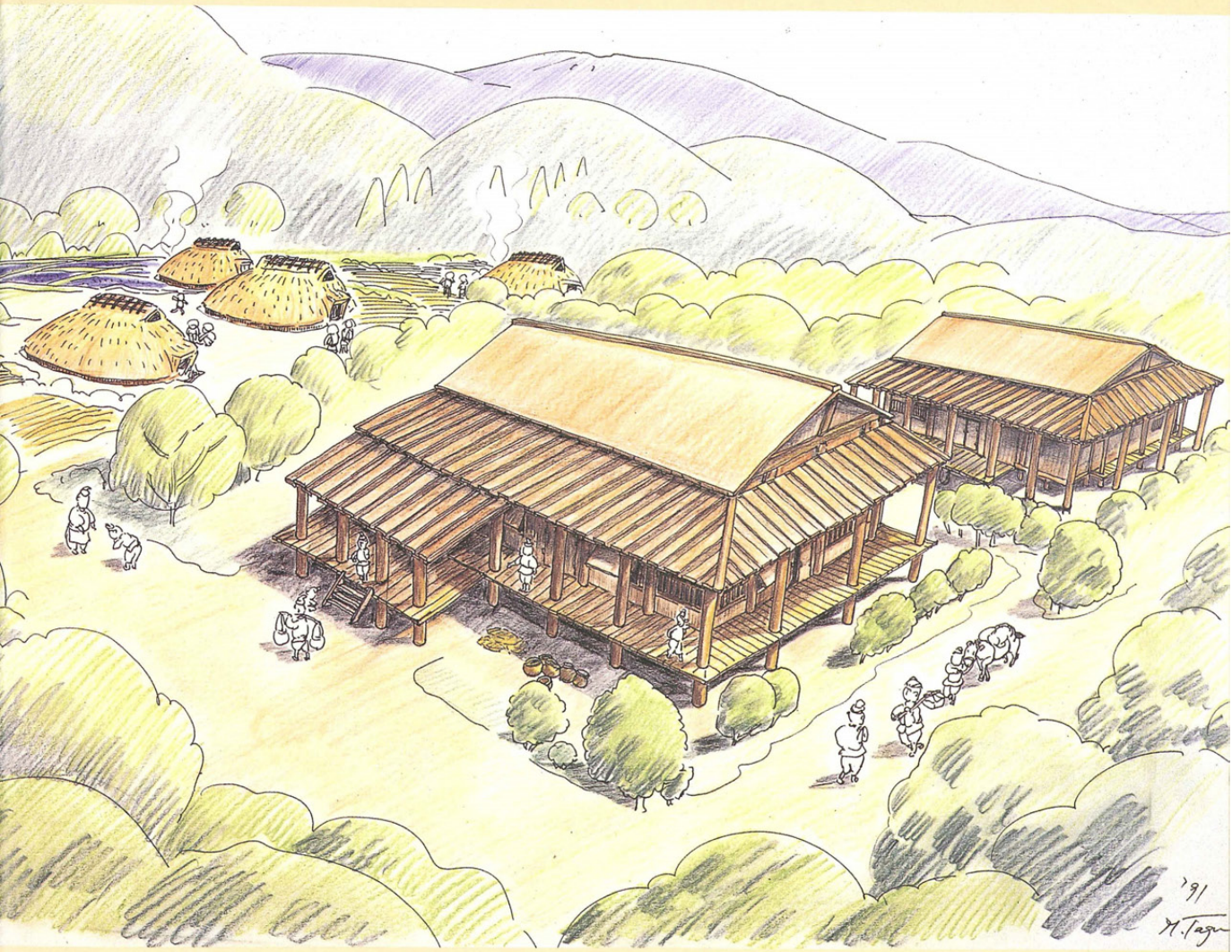
KOIKE SITE

小池遺跡

— 平安時代集落址の発掘調査 —



松本市教育委員会

遺跡の立地と環境

調査地は、松本市寿小池地籍である。ここは東から西へ緩やかな傾斜を成し、西側は水田として、東側は畑地として利用されており、標高は660m～663mに位置している。南側300mには鉢伏山より西へ流れる塩沢川があり、内田の小集落とその後ろに赤木山が見える。西下方１kmには北流する田川があり、当地とは約20mの比高差を生じている。また北側から東には寿住宅団地の家並と現在建設中の家が50～100mに迫ってきている。

周辺の遺跡では、南東の鉢伏山山麓地帯、内田集落付近に縄文時代の雨堀、エリ穴遺跡などがあり、また赤木山台上部からその縁辺には縄文・弥生・古墳時代の石行、横山城などが遺跡群を成している。これに対し、低湿地ともいえる田川沿いは上流より弥生時代以降の遺跡が多く、特に野村地区から吉田地区については、最近調査された吉田向井、吉田川西等を掲げる。これらからは平安時代を中心として前者は94軒の、後者は269軒の住居址を検出している。両者とも遺構の多さと緑釉陶器などの土器類に見るべきものが多い。

この小池を含む一帯は古代には筑摩郡の一つ良田郷に含まれ、東山道が通過していた。そして岐蘇路が開かれると合流して国府へ向かい、この辺に覚志駅が位置していたものと思われる。『延喜式』には「埴原牧」の名が見え、中山には牧監庁も置かれる。『続日本紀』には延暦８（789）年に「信濃国筑摩郡人……賜姓田河造」なる記事もあり、国司に匹敵する権力をもつ人物が牧場経営を背景に存在していたことを窺わせる。なおこの牧も平安末期には衰退し、『吾妻鏡』によると以後、北内・南内が代わって牧として登場している。

鎌倉時代に入ると、「小池郷」という名が見られ、独立した集落を成す。岡山県にある『赤木文書』によると、弘安９（1286）年には赤木氏が隣の赤木郷も含めて地頭であったとしている。また『小笠原文書』によると小池は東、西とあるが、それほど広いものかどうかはわからない。鎌倉末期には春近領となり諏訪下社領であった。室町時代に入ると、建武新政後の信濃は小笠原氏が領したが、大塔合戦後で小笠原氏は失脚し、ここ小池は料所となる。1425年には再び小笠原氏が守護となる。もと小池の地蔵堂に安置されていた応永29（1422）年銘のある奪衣婆坐像（現牛伏寺蔵）には、小池殿左馬亮信道と波多腰某が見えている。当時牛伏寺の参道はここ小池より始まっていたらしく、入口に当たる村井地区には地頭である村井氏が住した。この後天文17（1548）年、塩尻峠の合戦後に武田氏が入り、牛伏寺への寄進状には、武田信綱が小池を所領し、ここに隠居所を建てることを希望している。また元和３年以降小池は他の地区とともに、明治に至るまで諏訪高島藩に入り、藩は百瀬に陣屋を置いた。以後明治４年には高島県に、後に筑摩県、同９年に長野県となった。なお手元にある「旧高嶋藩殿様御枕絵図、五千石之部」（元本は享保の頃）を見ると、発掘地は旧小池村に当たり、西には南北に走る白河道、東に内田村松本道、また南には東西に流れる良道汐（セギ）があり、既に小池堤があったことがわかる。北側には宝蔵寺、諏訪明社（小池神社）、その東に山神が見えている。

調査結果

今回調査の成果は以下のとおりである。竪穴住居址は奈良時代13、平安時代前期41、同中期16、同後期５、不明４であった。掘立柱建物址５棟はいずれも平安時代前期である。住居址の内には柱穴配置に特色のある11・15・76住などがある。また建物址は県内でも最大規模のものであり、これらはいずれも後に図を掲げ触れる。遺物では22・30・44・45住などから優品の緑釉陶器が出土している。また銅製帯金具が25住より、皇朝十二銭の一つ「富寿神宝」が59住より出土した。９・62住にはフイゴの羽口、鎌、薄い小鉄片が多量にあり、これらが鍛冶関係の建物を示している。竪穴状遺構は５基とも近世あるいは近代のものである。４基の火葬墓はいずれも中世に属し、人骨とともに３基から渡来銭が複数出土している。溝は計22本ある。１は明治時代、上にある沢が決壊した氾濫の跡で、15は遺物よりみて奈良時代のものである。また２地区には７～10、19～21、24などがあるが、いずれも近世のものであり、井戸とともに後に触れる。土坑では灰釉陶器を出土した82が特殊なものである。また１地区南西部の方形土坑には内耳鍋が目立ち、中世の土坑群を成していた。ピットには時期不詳であるが、10本並ぶ柵列が２基見つかっている。

以上今回の調査は実質面積8,800㎡について行ない、主に平安時代前期を中心として、地形的には集落の南限まで実施できたと思われる。また東西はもう少し拡がるが、北はやはり15溝が奈良期の一つの集落境を示すものであろう。

調査地の範囲（1：4000）

発見された遺構・遺物一覧表

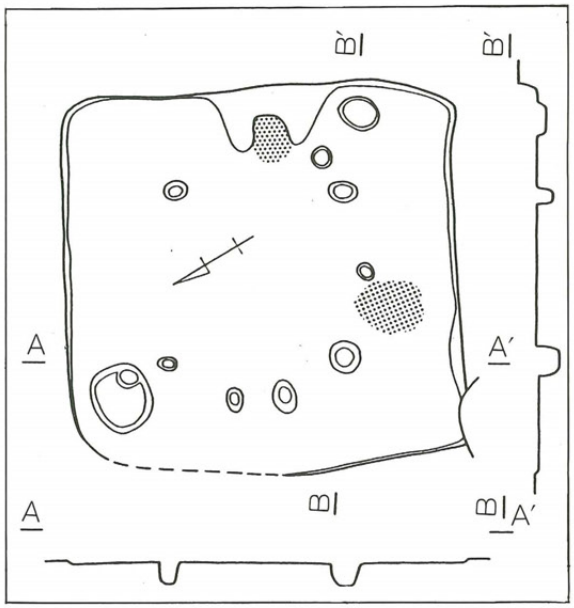
遺　構

遺　構	数　量
竪穴住居址	79軒
掘立柱建物址	5棟
竪穴状遺構	5基
火葬墓	4基
溝　址	22本
柵　列	2基
井　戸	1基
土　坑	78基
ピット	約700

遺　物

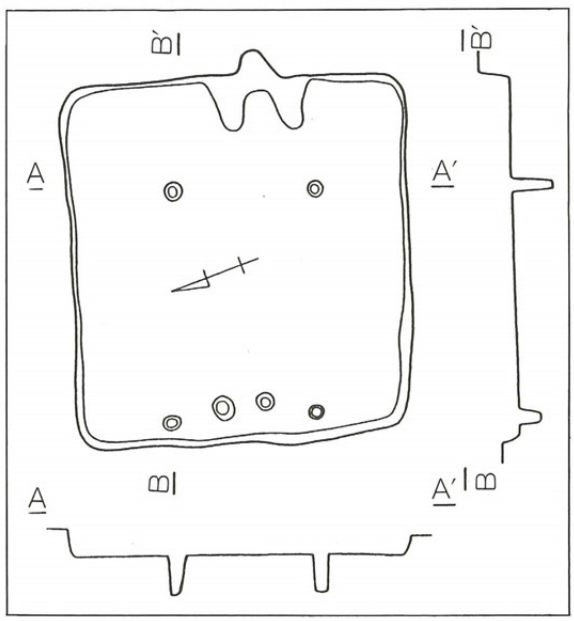
種類・種別	内　容　・　数　量
土器・陶磁器	縄文土器片少量、土師器・須恵器・灰釉陶器が主体で総量整理用コンテナ一40箱、緑釉陶器片約60点（陰刻花文陶を含む）、中・近世の内耳土器・青磁・瀬戸美濃系陶器など少量
鉄　器	鏃、鎌、刀子、紡錘車、釘、麻引金具など
石器・石製品	縄文時代の石器、砥石、擂鉢、石臼、火打石
土製品	土錘、フイゴ（羽口）、土製円盤
銅製品	帯金具（鉸具）、刀装具
銭　貨	皇朝十二銭（富寿神宝）１枚、渡来銭９枚、寛永通宝４枚、不明２枚

住居址 （1:80）



第11号住居址

規模は南北5.0m、東西5.1mで、主軸はN－117°－Eを測る。床面はロームで特に堅い。カマドは東壁中央に位置する粘土カマドである。主柱穴はあまり深くないP１～P４の４本で、入口のための２本の補助柱穴がある。遺物の量は少なく、カマド周辺より土師器甕と須恵器坏・坏蓋を得ている。８世紀中頃のものである。



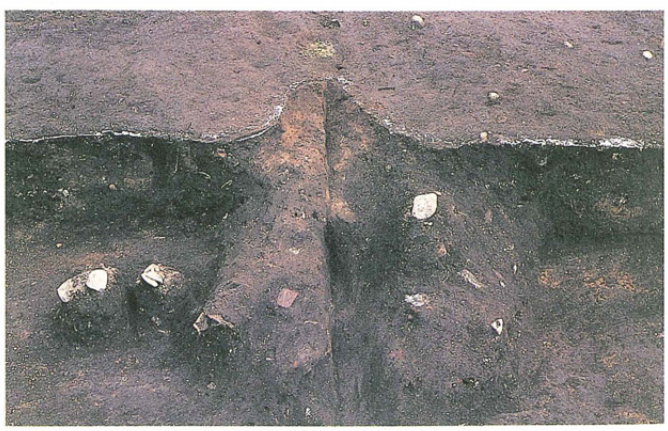
第15号住居址

規模は東西4.9m、南北4.6m、ここには第２号建物址が先行している。主軸はN－110°－E。壁高は最大47cmを測る。東壁中央には石芯粘土カマドが位置する。主柱穴は４本で、入口部に２本の補助柱穴をもつ。土器には土師器甕、内黒椀、須恵器坏などがある。８世紀後半のものである。

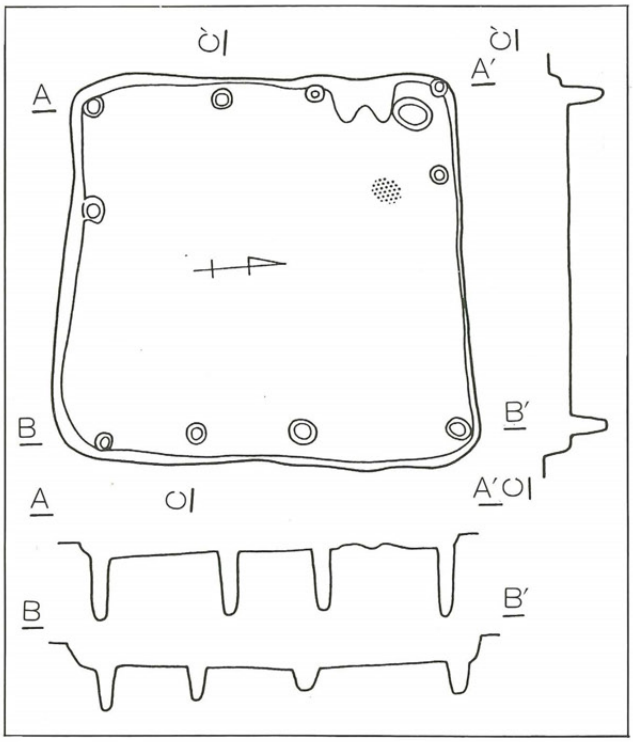
第11号住居址　完掘状態

同上　カマド

第15号住居址　完掘状態

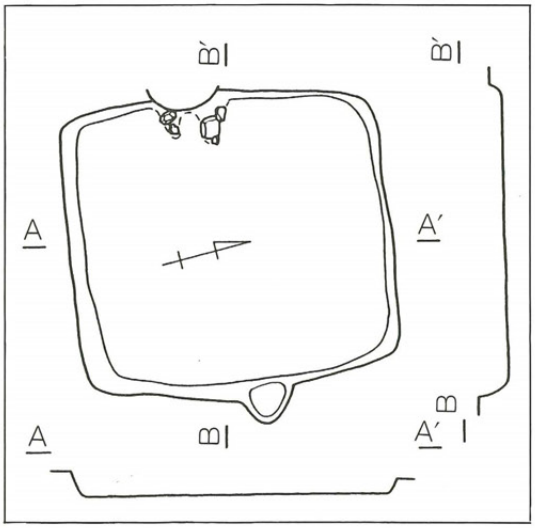


同上　カマド



第76号住居址

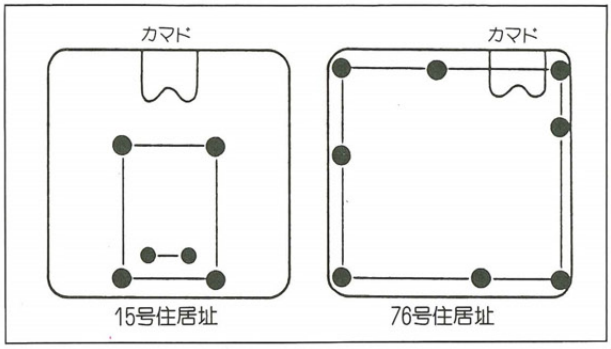
南北5.5m、東西5.1mを測り、主軸はN−83°−Wを示す。カマドは西壁北寄りにある。柱穴は壁際に計10本並び、いずれも径は小さいが深い。遺物量は多く、全体から出土した。土器は土師器椀、内黒椀・皿を中心とする。鉄器に刀子・紡軸などがある。これらは9世紀中頃のもので、今回調査した住居址の主たる時期である。



第38号住居址

規模は南北4.2m、東西4.1m、主軸はN−83°−Wを指す。南部覆土中には近世の溝がつくられた。残存壁高は最大35cmを測る。床はロームで堅く良好である。カマドは石組カマドが西壁にある。柱穴は見当らない。遺物はカマド北側から北壁にかけて多く、土師器坏・椀、灰釉陶器椀が中心になる。10世紀初頭の様相をみせる。

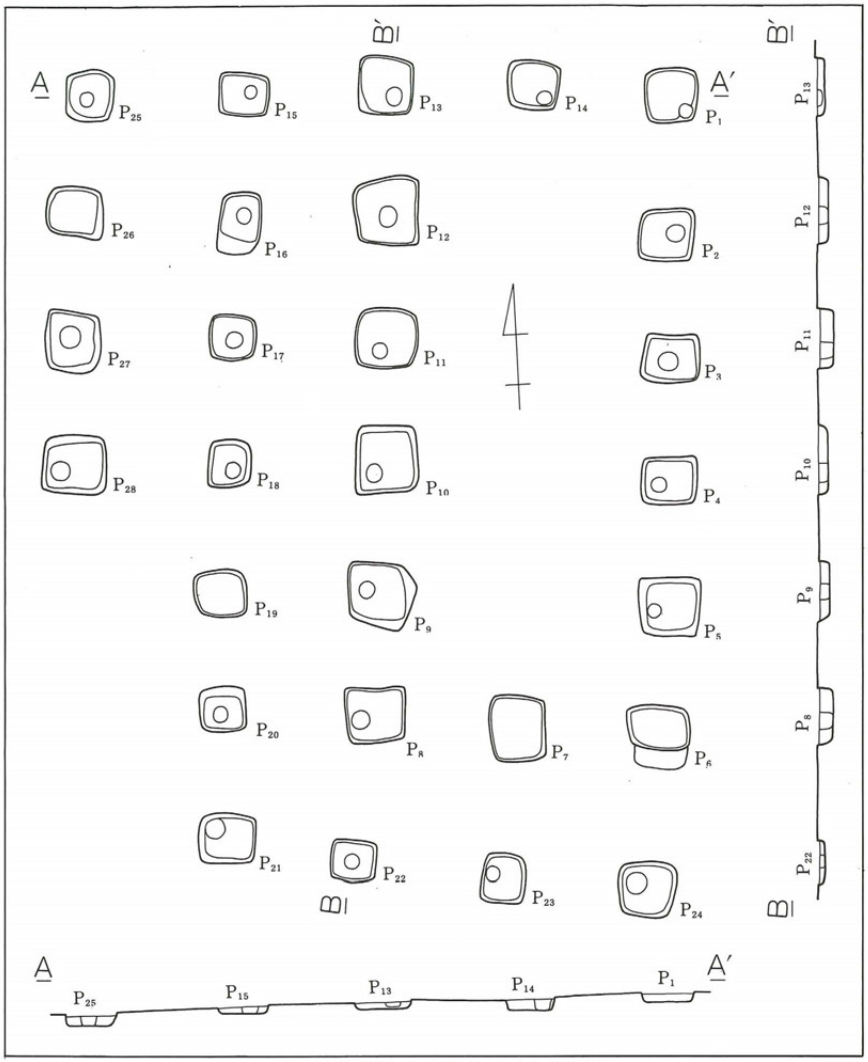
第76号住居址　完掘状態



柱穴配置模式図

第38号住居址　完掘状態

同上　カマド



第 1 号建物址実測図（1：150）

建物址

掘立柱建物址は 5 棟を検出した。これらは重複せず、ある程度の距離を保つように位置している。1～3 はその全容を調査したが、4 は住居址のため、5 は別工事により、その一部が不明瞭となってしまった。

これらの構造はすべて側柱式が基本となっており、1 は西と南に廂を設け、さらに西の一部に孫廂がつく。2 は西に廂を設け、一部を総柱にしている。

棟方向と規模について見てみると、1・2 は南北に長く、廂まで含めると 6×4（3）間となり、現在県内で調査された中で最大規模のものである。3 は 1×2 間、4 は 2×3 間、5 は 2×4 間以上となり、いずれも東西に長くなっている。

掘り方は平面方形（1・5）、一部が方形（2・4）、あるいは円形（3）のものがある。

埋没状況について見ると、柱痕跡が明瞭に残り根腐りを示すもの（1・2）、柱穴が重複しており抜き取った可能性のあるもの（2 の一部、4）、覆土が単層で柱の様子が全くわからない 5 があった。

遺物は少ないながら 5 棟とも、8 世紀末から 9 世紀前半の土器類を出土する。1・2・5 は大きな規模、広い柱間寸法、方形の掘り方などから、役所のような公的性

第 1 号建物址

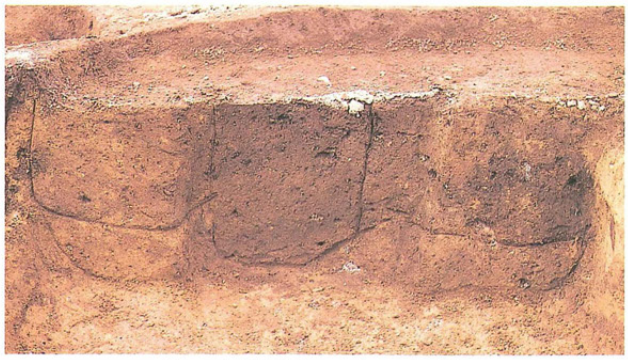
南北に長く、廂まで含めた規模は18m×12mである。柱間寸法は桁間 8 尺、梁間 9 尺、廂部は11尺となっている。柱穴の掘り方は 1 辺 1 m前後で、柱痕跡は直径30～40cmであった。床を設けた居館ないし役所の施設と考える。

第 5 号建物址

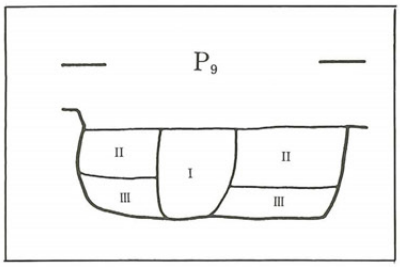
東側はわからないが、現状 9 個の柱穴から成る。柱間寸法、掘り方などは 1 建と同規模のものである。近接する 1 建とは棟方向を90°違えており、1 建を主殿とすると脇殿としての性格をもつ建物と考える。

格をもつ官衙的な建物、あるいは郡司層の居館などと考えられる。配置状況も考慮すると、大規模な3棟は4の倉あるいは3の小屋的な施設とセットとして使用されたものであろうか。住居址との関係を見ると、この建物址直後の時期がその後のピークとなり、帯金具を出土した25住も同時期である。

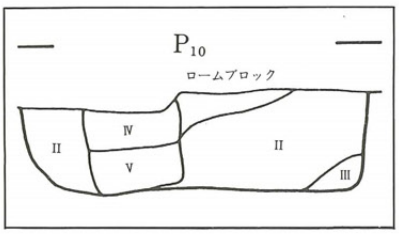
1建は総計28基の柱穴のうち、22基について土層断面に柱痕跡を認めた。Ⅰの暗褐色土層がそれであり、自然埋没の様相を示す。周囲はⅡのローム塊混入黒褐色土で埋め立てている。20基がこのような状況にあったが、ここに掲げたP_{658}とP_{659}は、後世に住居址を設けた際に移動した土や残っていた柱材を抜き取ったためか、他とはやや変わった土が見えている。



第1号建物址　P_9掘り方断面



Ⅰ：暗褐色土
Ⅱ：ローム塊混入黒褐色土
Ⅲ：ローム塊多量混入暗褐色土
Ⅳ：小ローム塊多量混入暗褐色土
Ⅴ：ローム塊多量混入黒色土
（ローム塊が板状に混入）
1：30

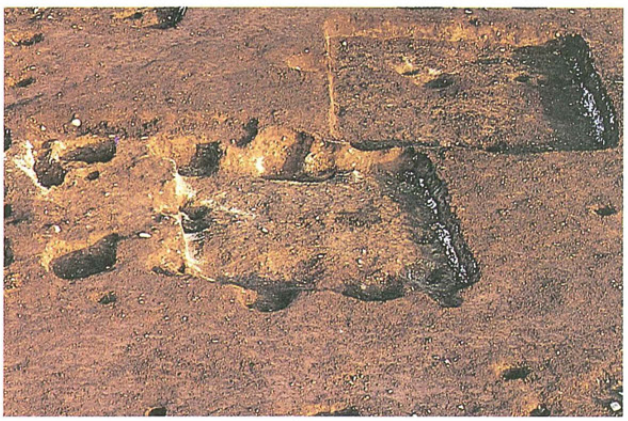


1建は総計28基の柱穴のうち、22基について土層断面に柱痕跡を認めた。Ⅰの暗褐色土層がそれであり、自然埋没の様相を示す。周囲はⅡのローム塊混入黒褐色土で埋め立てている。20基がこのような状況にあったが、ここに掲げたP_{658}とP_{659}は、後世に住居址を設けた際に移動した土や残っていた柱材を抜き取ったためか、他とはやや変わった土が見えている。

各建物址の棟方向

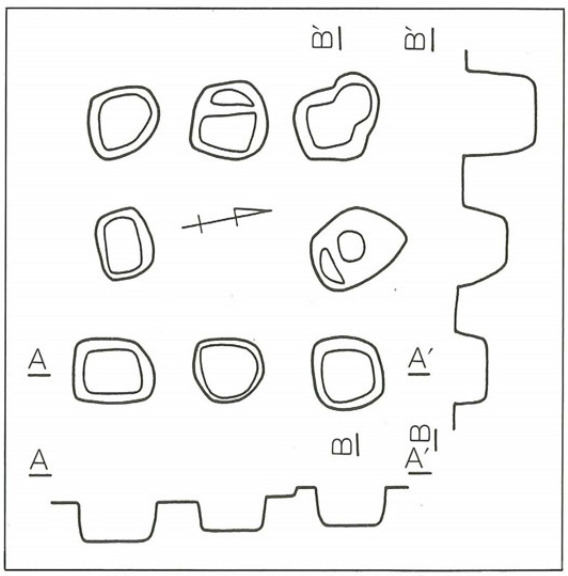
1建：N－0°－E
2建：N－5°－E
3建：N－91°－E
4建：N－95°－E
5建：N－91°－E

同上 P_{10}　掘り方断面

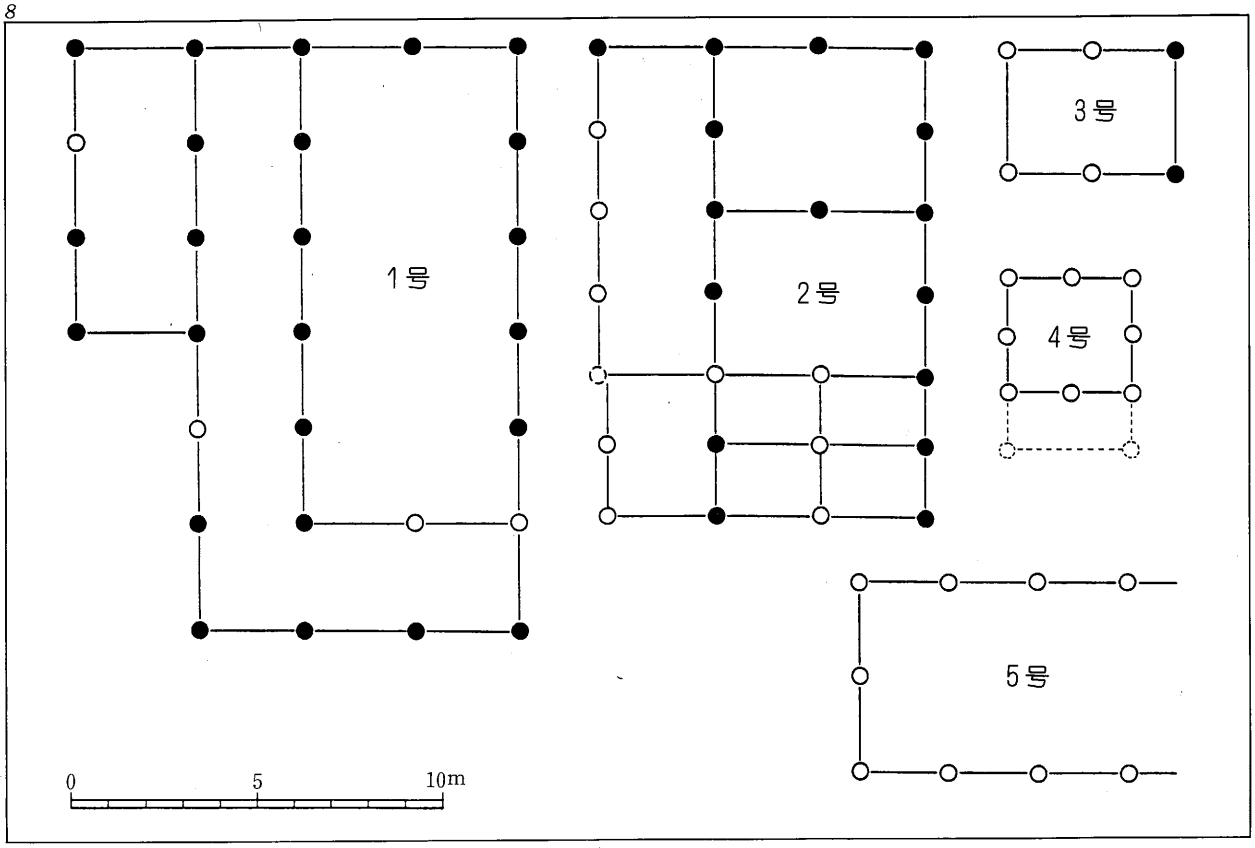


第4号建物址

柱間寸法が5尺前後で、規模は3.3m方形の建物であり、南には廂が付いていたようである。倉など収納施設としての性格を考えたい。柱穴の平面形が不整形で、建替があったことが窺える。



第4号建物址実測図（1：80）



本調査発見の建物址模式図集成（白ヌキは掘り方のみ、黒丸は柱痕あり）

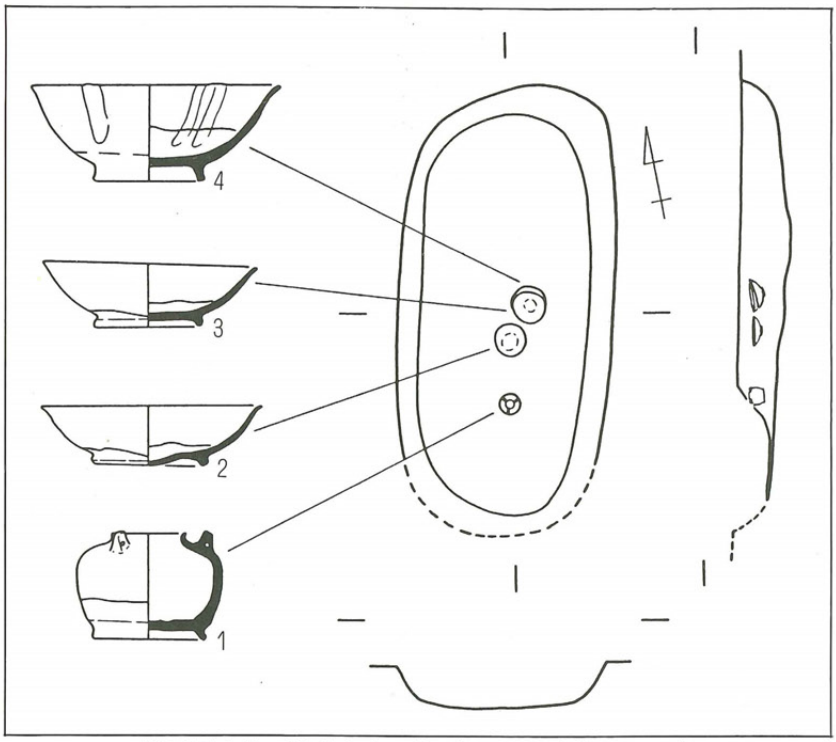
建物跡の大きさ比較

上図は今回の調査で発見された建物址すべての平面形と規模、軸方向、柱間、柱痕の有無を比較する模式図である。1・2・5号が特別に大きいことや、1号と2号が最終的に同じプランを持つことなどがわかる。軸方向からみると、1・3・5号がほぼ真北かそれに90°直交するのに対し、2・4号は東へ約5°振れており、それぞれ1号と2号を中核とする2個ないし2時期のグループが想定できよう。また2号は、南側の2間分の柱間が他より微妙に短く、後から増築した可能性も指摘できる。

下表は松本市内で発見された大形の建物址一覧（廂部分を含む床面積による比較）である。本遺跡1・2号は床面積、桁・梁行の長さともに3番目以下を大きく引き離しており、当地域においては飛び抜けて巨大なものであることがわかる。また、2方向に廂を持つのも珍しい。この表には現れていない各建物の時期については、No.4～6・8・9が7世紀末～8世紀前半、他は9世紀代と推定されており、本遺跡1・2号も出土土器や遺構の重複などから9世紀前半までに属すると考えられる。

松本市内発見の大形建物址一覧

No.	遺跡・遺構	規模 桁×梁（間・m）		面積	柱間 桁	柱間 梁	柱穴 平面形	柱穴 規模	備考
1	小池・1号建物	6×3	15.36×8.60	132.01	2.50～2.85	2.75～3.00	方	0.85～1.05	南・西面廂、西に3×1間の孫廂
2	小池・2号建物	6×3	12.30×8.50	104.55	1.85～2.15	2.80～2.85	方・円	0.68～1.00	南・西面廂
3	三の宮・ST61	4×3	7.63×8.30	63.33	1.87	2.65～3.11	方	0.65～0.85	南面廂
4	南栗・ST560	5×3	9.08×5.54	50.30	1.46～2.44	1.56～1.70	方	0.92～1.26	西面廂
5	南栗・ST538	4×3	8.54×5.19	44.32	1.98～2.22	1.68～1.80	方	0.68～0.95	南面廂
6	三の宮・ST21	4×3	7.98×5.33	42.53	2.00	1.30～1.90	円	0.30～0.60	床束？
7	北栗・ST 8	3×2	10.44×4.06	42.38	3.18～3.70	1.94～2.10	方	0.65～0.90	
8	千鹿頭北・建物址6	6×5	7.60×5.40	41.04	1.40～1.60	1.30～1.40	楕円	0.90～1.50	柱穴間が溝で連結
9	南栗・建物址3	5×3	8.30×4.80	39.84	1.50～1.80	1.60～1.70	円	0.73～1.23	南面廂
10	三の宮・ST57	4×2	7.93×4.98	39.49	1.90	2.46	円	0.40～0.96	



第82号土坑　遺物出土状態（1：20、遺物は1：4）

土壙墓

南北約160㎝、東西76㎝の規模をもつ楕円形の土坑である。南側は近世の8溝に破壊されている。ローム中に掘り込まれており、その深さは現況で20㎝を測る。埋土は径0.2㎝～0.5㎝の小礫を含む暗褐色土である。

遺物は中央やや南の覆土中に灰釉陶器の椀3点、そして南部のほぼ床面上に灰釉陶器の三耳壺が1点、いずれもほとんど完形のまま、正位で出土した。人骨等は見当たらないが、このような出土状況から遺物は副葬品と考える。本址は10世紀代の土壙墓であろう。

同時期のものとしては近接する吉田川西遺跡に、7点の緑釉陶器と灰釉陶器の広口瓶1点他を出土する例が見られる。なお里山辺の石上遺跡では棺の痕跡や副葬品の残りも良く、埋葬時の状況を推測するに足る出土例がある。

第82号土坑完掘、奥側は8溝により破壊されている。北から。

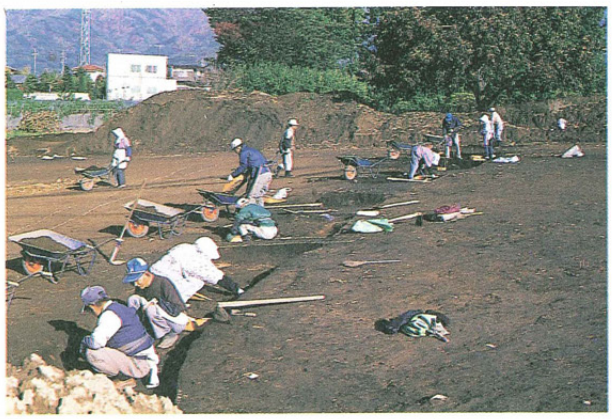
第82号土坑遺物出土状況。左3点は覆土中から、右はほぼ床面上から。西より。

同　出土遺物：灰釉陶器椀3点、灰釉陶器三耳壺1点

溝

溝は計23基ある。これらは幅50㎝（19号）から440㎝（２号）、長さも3.6m（22号）から71m（１号）までと多彩である。時期的には奈良時代の15号から近代の１号まであり、その用途は土層よりみて自然流路の１号、水路としての８号、空濠らしき15号などがあり、これら以外にも地区南端に石を充塡させた暗渠が３基があった。

１は地形なりに東から西へ、少し蛇行しながら向かっている。幅50～240㎝、深さ５～150㎝で、狭広、浅深が目立つ。断面形は不定形、所々Ｖ字形をなす。地元にある古文書によると、永禄３（1562）年の水論の後、牛伏川の水を小池へ引いていた訳であるが、大雨によりその水路が度々切れ、洪水となり流れたようである。近くは明治29年7月の大洪水があり、下の田川にまで流れていった記録が残っている。この溝はその痕跡の一部であろう。



（左上）15溝の掘下げ作業、西から
（右）15溝完掘、西から
（左下）１溝が地を深く削り込んでいる。覆土は砂礫で充満。深さ90㎝以上。東から
（右下）１溝が19住を破壊している。西から
（下）７溝（左は20溝）。１建は溝より古い。東から

７は住居址、建物址より新しい。Ｕ字形の断面、覆土、規模などの共通点を19・20に見る。同時代のものは８・９・10・17・24があり、この辺に集中する。遺物はこれら溝内と２地区に散布し、近世陶磁器類が少量である。

15は北向斜面を東西に通り、西端は南西へ向く。幅は130～240㎝、覆土は黒色で水を伴わない。遺物は中層に須恵器の坏蓋、同鉢型土器などがあり、奈良末の集落を区画した溝と考える。

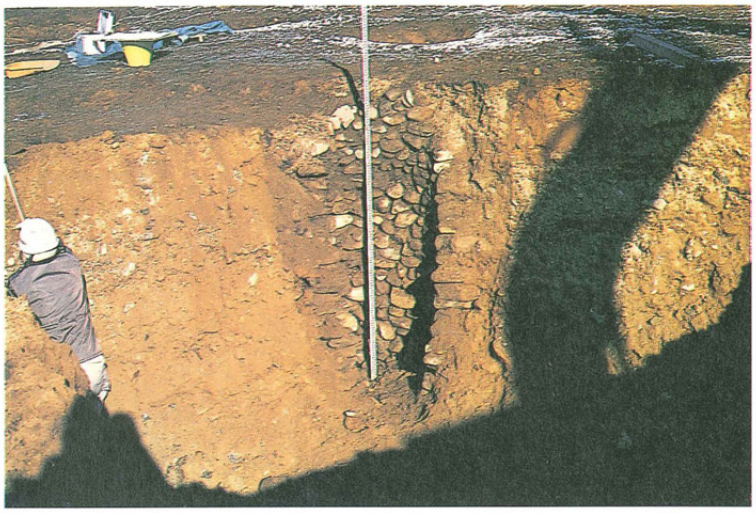
近世の屋敷地

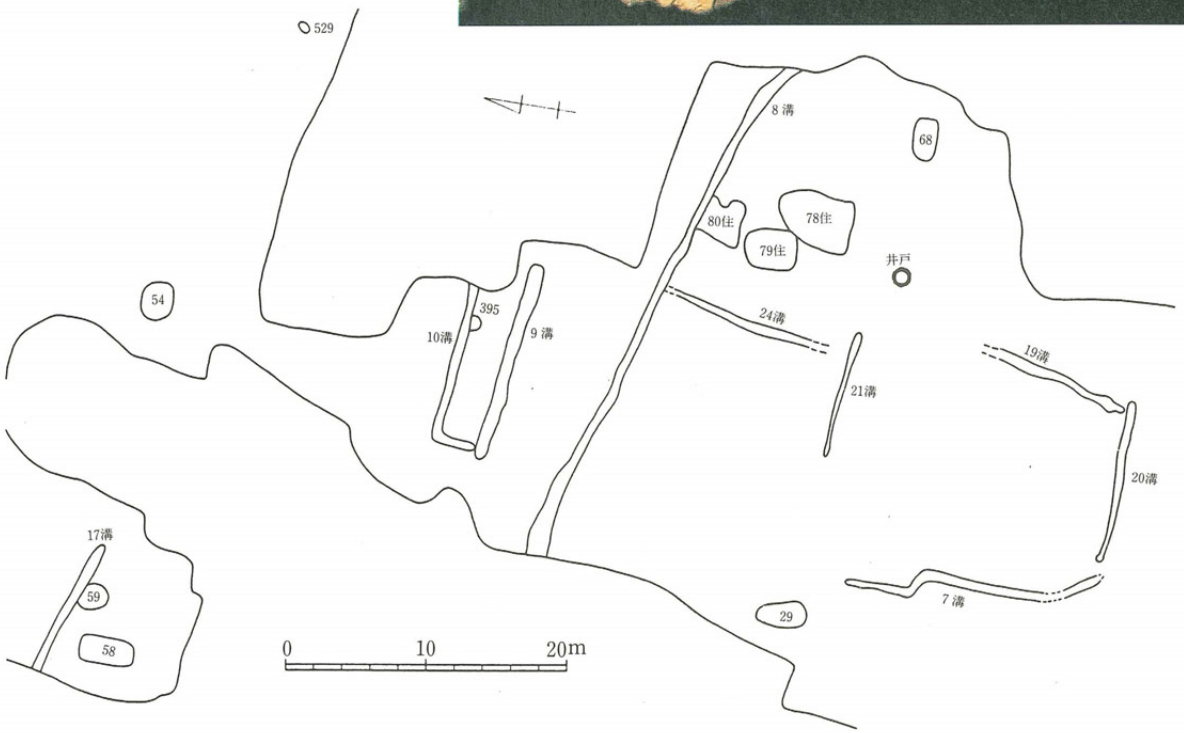
当地は地下水の浅い所で、今でも畑中に灌漑用の井戸がある。井戸は住居址掘込中に確認した。底部水溜上には仕口を45°に切って井籠組を行ない、その上に地表まで約3.5m円筒形に石組みし、井戸側を形成した。最下部は地表下約４mの粘土層上で、現在も水が湧いているため細部まで検証できなかった。ただ廃棄時には、四角いホゾ穴をもつ井桁より長い煤けた住宅用板材と付近より切り出した長さ70cm、直径30cmの赤松の丸太が一番最初に投げ込まれたようで、その上部には拳大～小児頭大の石、最上部には土が充塡された様子がよくわかる。なお遺物には御深椀、灯明皿、石臼などがあり、その廃絶期は18世紀の様相を見せる。

第７・19・20・21号溝は屋敷を取り囲む溝と思われる。７溝の北端は鍵の手となり、敷地への入口を示しているらしく、これらで画される広さは約106坪になる。溝は現在東と南、北の農道で囲まれる大きな区画内の南西隅に位置している。７・20溝はそれぞれ西と南の農道下にあり、入口を想定した所は旧「白河道」への道があるなど、現区画に符合する点が多い。この中には某家の墓地や古木等があり、大きな屋敷地であったことを窺わせる。水路の８溝と上記井戸址からは18世紀代の遺物を、また近くの土坑からは中世末頃の古瀬戸碗などを得ている。これらの施設は大きな屋敷地に含まれる。遺物、地元の言い伝えも考え合わせると、戦国時代から近世にかけて比較的有力な人物がここに居住したものと考える。

井戸上部の石組み

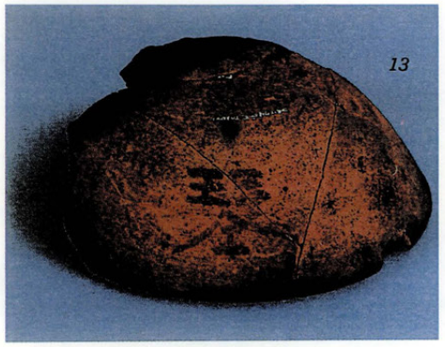
(下)井戸の断面を見るため重機で掘ったところ



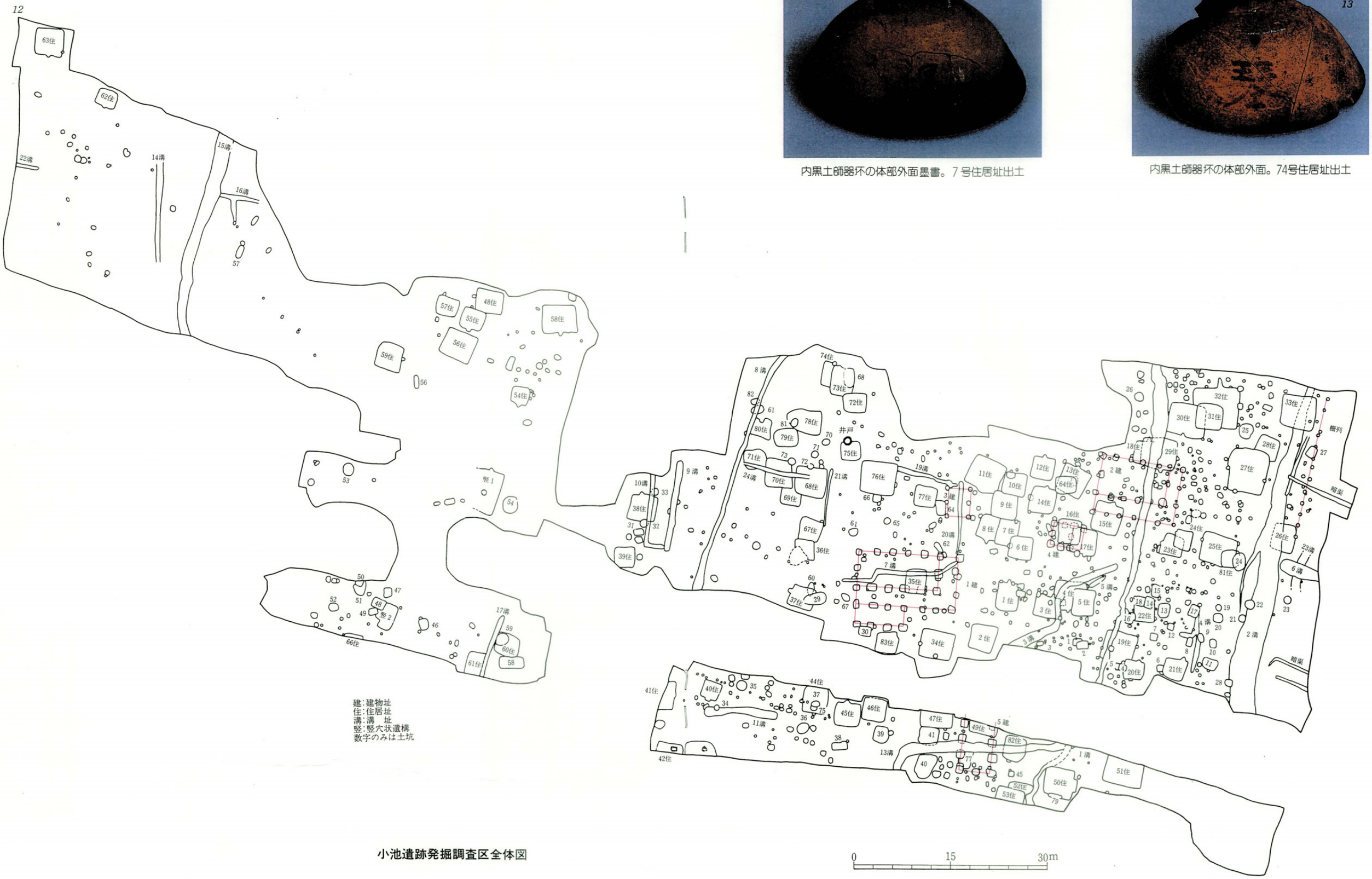


中世以降の遺構配置

内黒土師器坏の体部外面墨書。7号住居址出土



内黒土師器坏の体部外面。74号住居址出土



建:建物址
住:住居址
溝:溝　址
竪:竪穴状遺構
数字のみは土坑

小池遺跡発掘調査区全体図

0　15　30m

土器・陶磁器

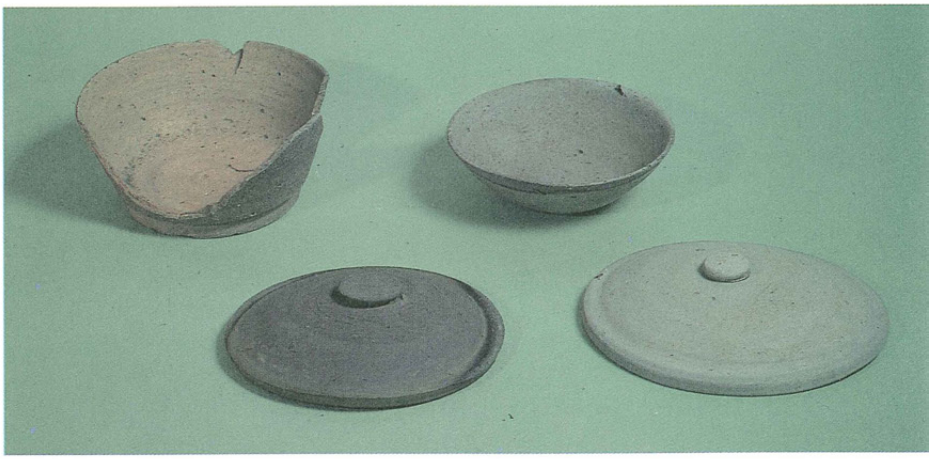
土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・青磁・白磁・瀬戸美濃系陶器などが出土しているが、量的には古代の遺構に伴う土師器・須恵器・灰釉陶器が大半を占める。緑釉陶器は小片も含めて総数で58点の出土だが、当地域の該期遺跡のなかでは際だって多いといえよう。

土師器

坏・椀・皿などの食器類と、煮炊具の甕がある。出土土器のなかでは量的に最多で、本遺跡の時期を代表する土器といえる。食器類のほとんどは内面に黒色処理が施される、黒色土師器である。写真は黒色土師器の坏と椀。

須恵器

坏・有台の坏・坏の蓋などの食器と大小の貯蔵用の壺類で構成される。土師器に次いで量は多いが、比較的古い時期の住居址から出土する。坏のなかには焼きがあまい軟質のものも見られる。写真後列左は有台坏、右が坏、前列は坏の蓋である。

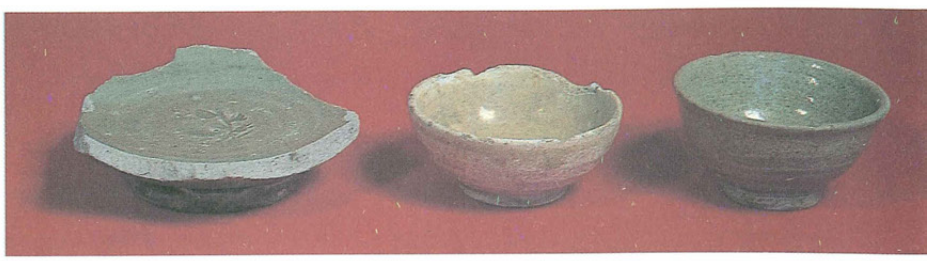


灰釉陶器

椀と皿が大半で、少量の壺類が混じる。住居址には出土土器が灰釉陶器で主体的に構成されるものはないが、土壙墓である第82号土坑への埋納品はすべて灰釉陶器であった。ほとんどが東濃産とみられるが、黒笹14号窯式の製品も散見する。写真は後列が椀、前列が皿である。

青磁・陶器

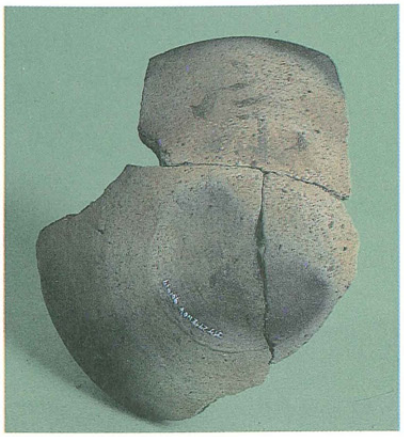
中世～近世にかけての陶磁器類も少量出土している。写真右と中央は17世紀末～18世紀の瀬戸・美濃系小椀。写真左は見込に草花文の陰刻をもつ青磁。



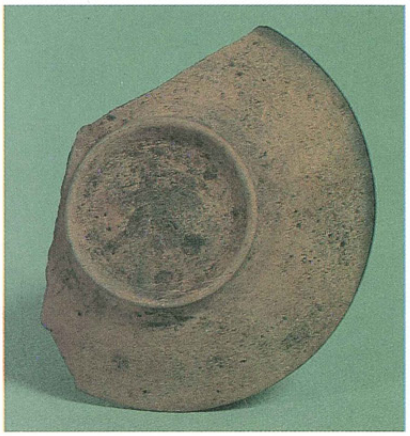
墨書土器

外面に墨で字、ないしは記号が書かれる墨書土器が多数出土している。同期の他の遺跡に比べてかなり多く、本遺跡の特殊性を物語る根拠の一つである。墨書のほとんどは内黒土師器の食器類（坏・椀・皿）の体部外面か底面に記されるが、土師器小形甕の胴部外面にある珍しい例も見られる。複数の文字・記号が記されるものも散見する。出土状況は各遺構から散発的で、地点的に集中することはなかった。（13頁上段にも2点を示す）

内黒土師器椀の高台に囲まれた底面に書かれる。下半部が欠損するため文字の特定ができない。30号住居址出土。

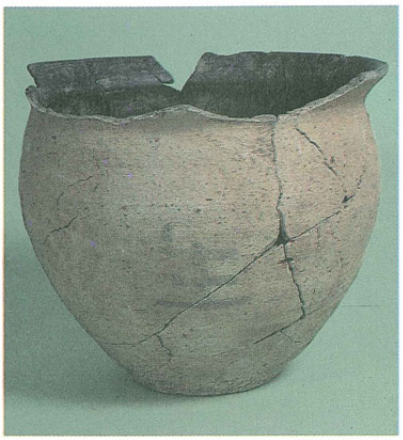


内黒土師器の坏体部外面に正位で「宗」の墨書。かなり達筆である。27号住居址出土。

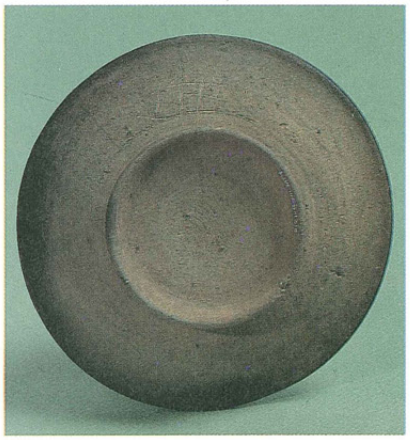


内黒土師器の皿の底面、高台内側に「大」の墨書。68号住居址出土。

内黒土師器の坏体部外面で逆位で「上」の墨書。書体は太く稚拙。1号住居址出土。



内黒土師器の小形甕胴部に正位で「生」の墨書。小形甕への墨書も、内黒土師器の小形甕も珍しい。59号住居址出土。



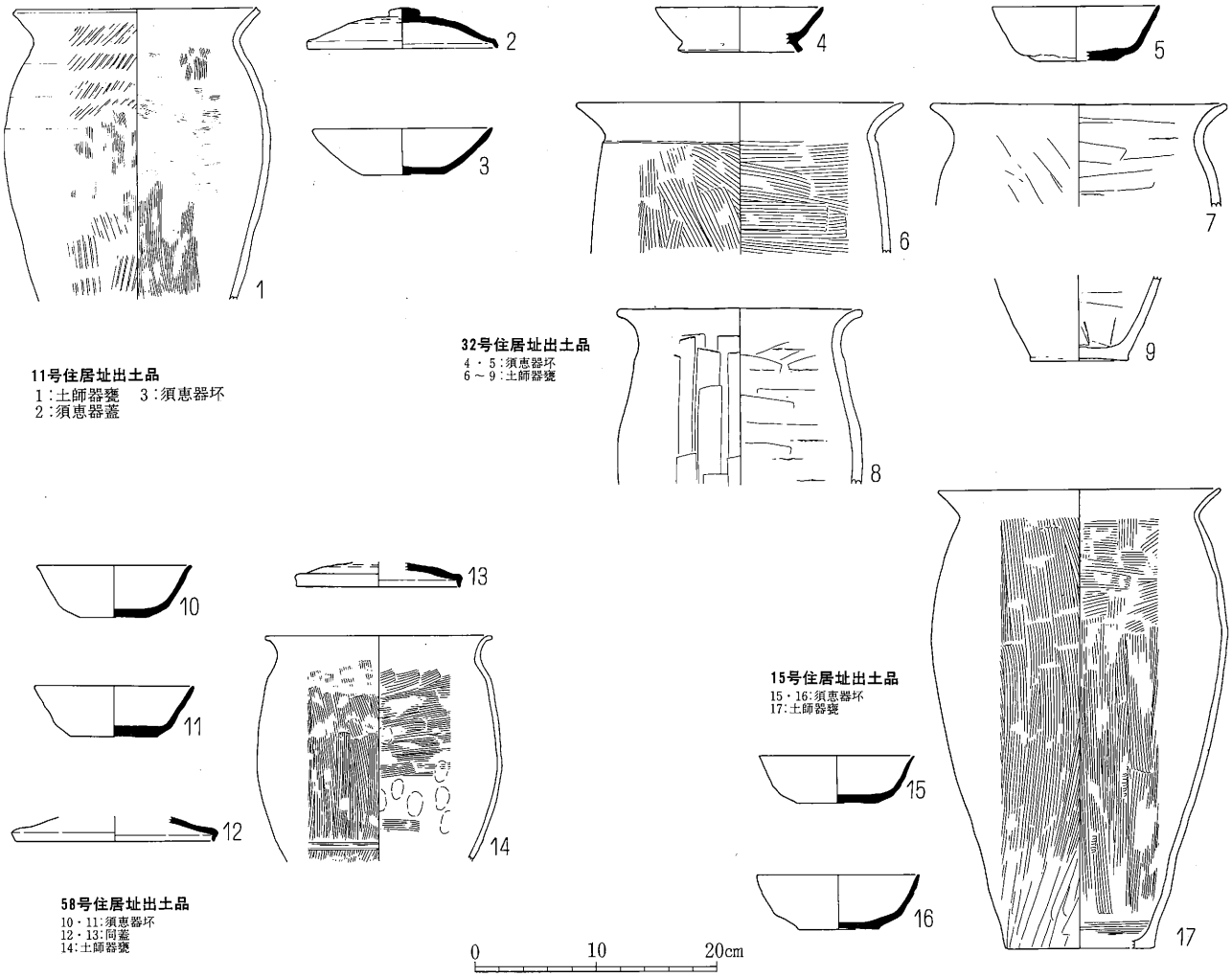
完形の内黒土師器皿の体部⅓周ほどに細い線刻がある。「田」と読める部分があるが、他は不明。10号住居址出土。

土器の種類と変化（16・17頁）

松本平南部では、いくつかの発掘調査の結果から、古代の土器について、器種組成と個々の型式変化の方向が大枠で判明している。ここではその成果を用いて、今回、住居址から出土した代表的な土器群について概観し、相対的な時期の区分を考えてみる。区分の基準は坏・椀類の種別・形態や製作技法の差に基く。

16頁は須恵器の坏が主体になる時代。そのなかでも、底面ヘラ切り・ヘラケズリ→糸切り→底径縮小・体部直線化、の順に変化し、それぞれに11号住居址・32号住居址段階（1～9）、15号住居址・58号住居址段階（10～17）、25号住居址段階（18～24）が相当する。土師器の甕は、厚手（7～9）・ハケメ（6・17）タタキとロクロ（1）の3種からハケメのみのものに絞られていくが、最後にケズリのもの（21～23）が短時期現れる。

17頁は黒色土師器が主体となる時代。さらに、黒色土師器坏内面の緻密なミガキ・須恵器坏の残存→同ミガキの粗雑化・灰釉陶器の出現と増加→同ミガキと黒色処理の省略、の細かい変化を認め、10号住居址・76号住居址段階→30・46・68号住居址段階→38住居址段階を考えることができよう。灰釉陶器はまず少量の猿投産K－14号窯式のものが、やがて東濃産のものが多量に伴うようになる。



11号住居址出土品
1：土師器甕　3：須恵器坏
2：須恵器蓋

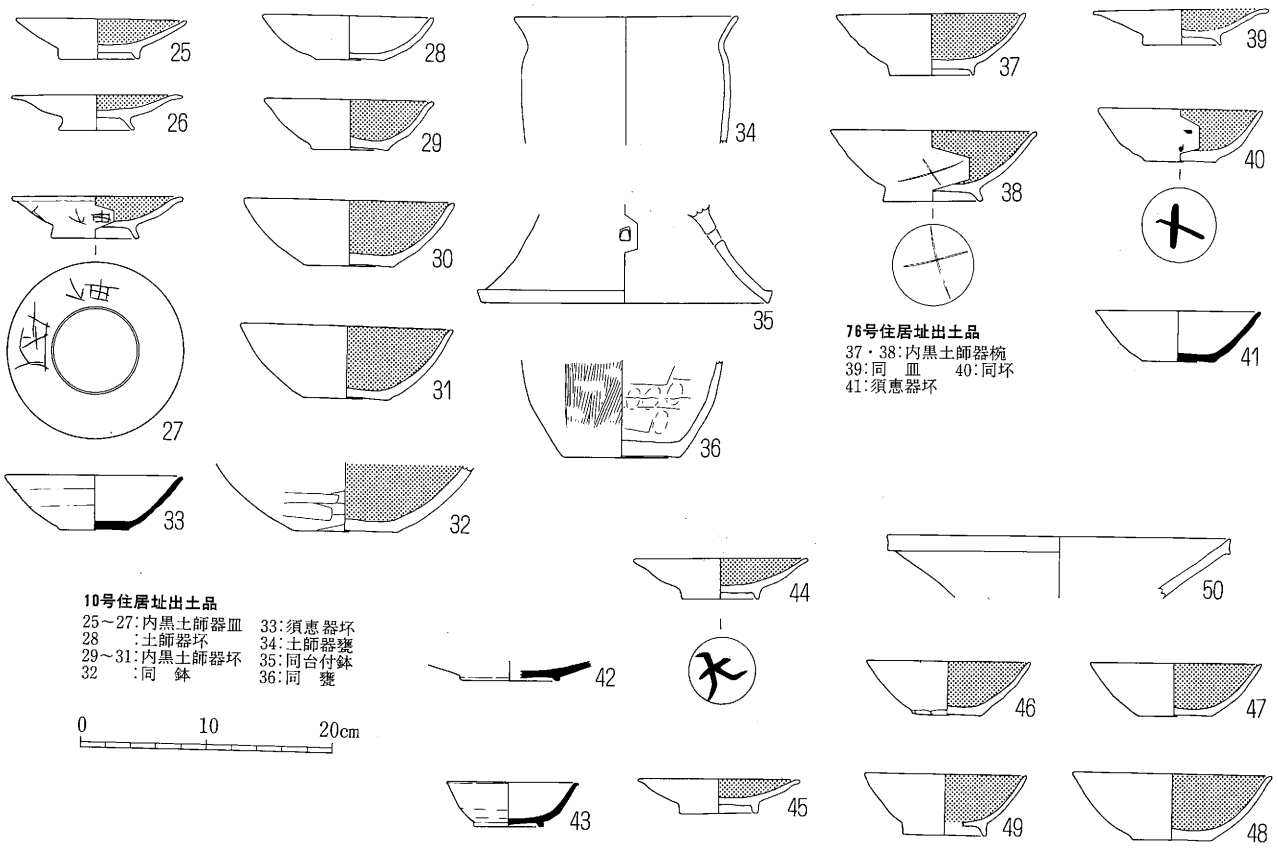
32号住居址出土品
4・5：須恵器坏
6～9：土師器甕

58号住居址出土品
10・11：須恵器坏
12・13：同蓋
14：土師器甕

15号住居址出土品
15・16：須恵器坏
17：土師器甕

25号住居址出土品
18～20：須恵器坏
21～23：土師器甕
24：須恵器甕

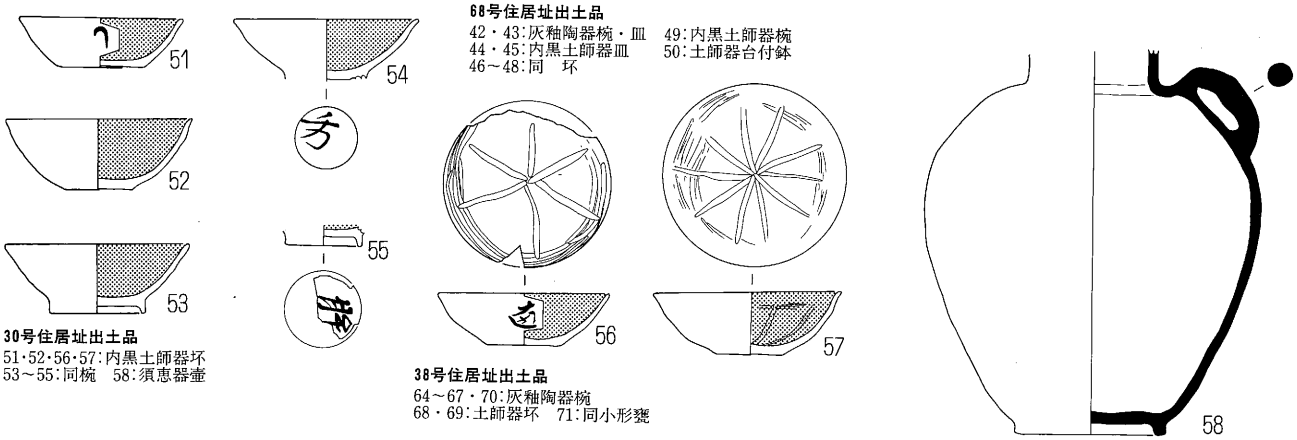
土器実測図（1）



10号住居址出土品
25～27:内黒土師器皿　33:須恵器坏
28　:土師器坏　34:土師器甕
29～31:内黒土師器坏　35:同台付鉢
32　:同　鉢　36:同　甕

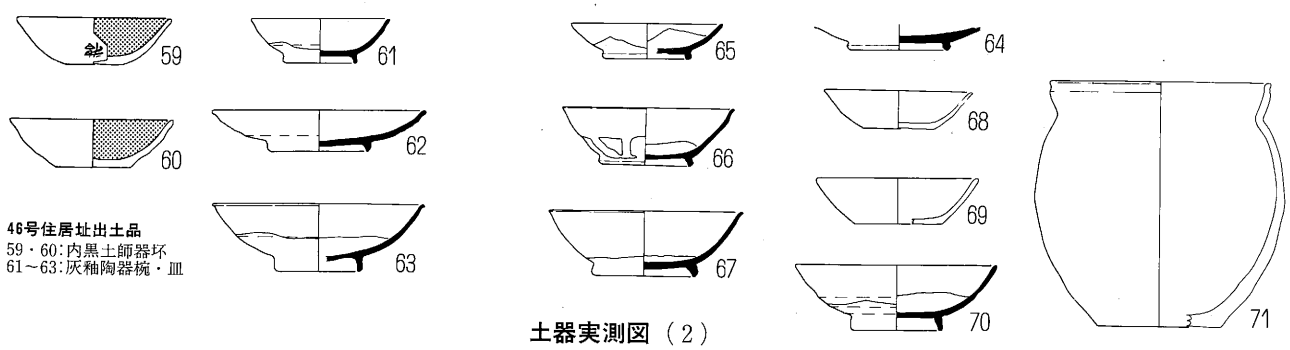
76号住居址出土品
37・38:内黒土師器椀
39:同　皿　40:同坏
41:須恵器坏

68号住居址出土品
42・43:灰釉陶器椀・皿　49:内黒土師器椀
44・45:内黒土師器皿　50:土師器台付鉢
46～48:同　坏



30号住居址出土品
51・52・56・57:内黒土師器坏
53～55:同椀　58:須恵器壷

38号住居址出土品
64～67・70:灰釉陶器椀
68・69:土師器坏　71:同小形甕



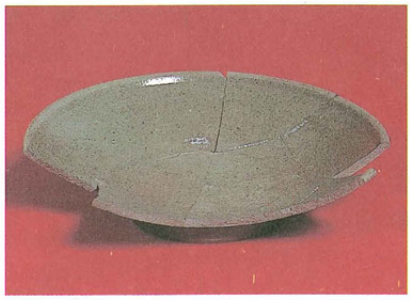
46号住居址出土品
59・60:内黒土師器坏
61～63:灰釉陶器椀・皿

土器実測図（2）

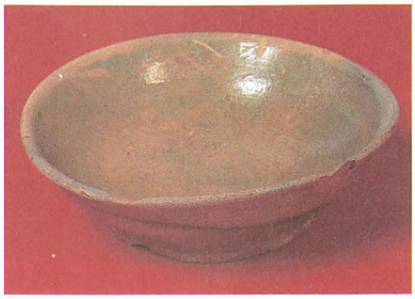
緑釉陶器

本遺跡出土土器の特徴の第一は何といっても緑釉陶器の多さである。大小の破片58点が出土したが、そのうちの5点は陰刻花文陶であった。器種は椀・皿類が圧倒的に多いが、瓶類も3点ほど見られる。釉の発色は薄い草色や黄緑から濃緑色まで様々だが、概して淡色のものが多い。出土状況は住居址の覆土や検出面から散発的に出土しただけで、集中する傾向はない。

草色釉調の輪花椀。口縁部を½ほど欠くが全形がわかる優品で、漆状の付着物が僅かに認められる。胎土は硬質灰白色、底面施釉、付け高台。46号住居址出土。

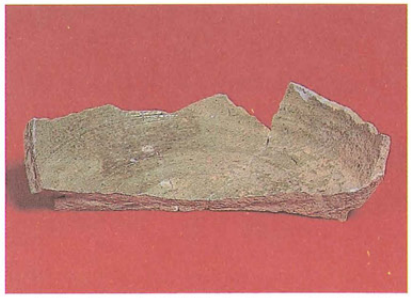


草色釉調の皿。口縁部を⅓ほど欠く。胎土は硬質で灰白色。高台はケズリ出しで、底面は露胎である。30号住居址出土。

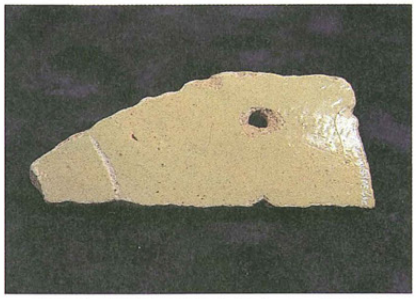


小形の坏。口縁を僅かに欠くだけの良好な状態である。底面は回転糸切り痕をそのまま残し、露胎。胎土は橙色軟質で、釉の発色も悪い。22号住居址出土。

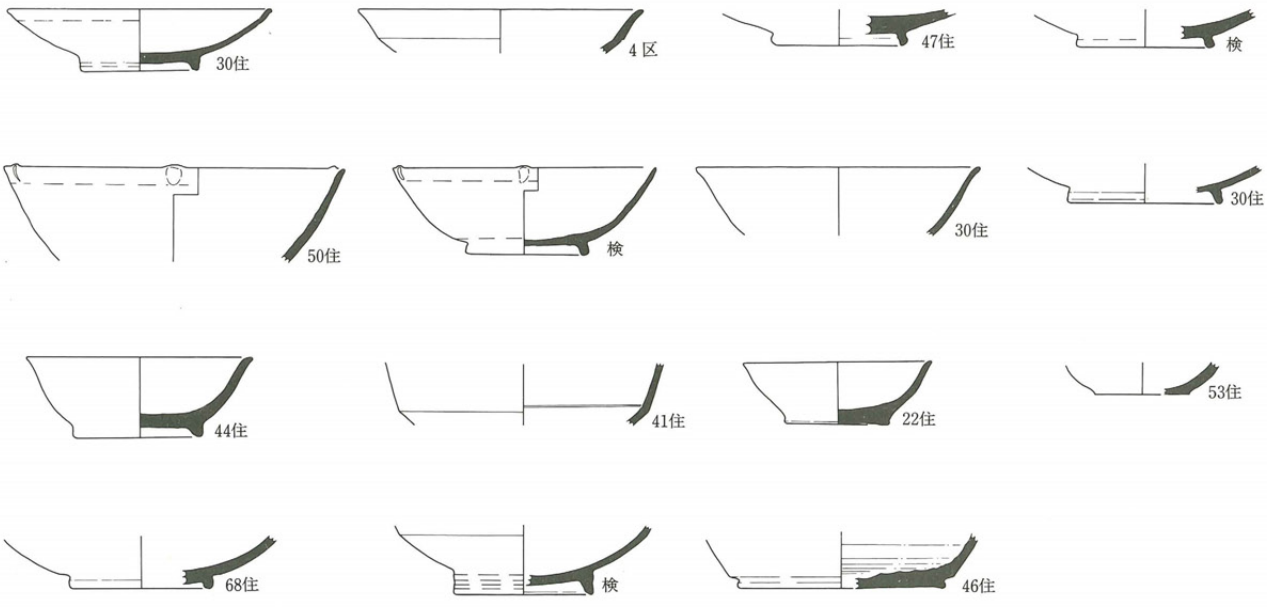
体部を僅かに欠くがほぼ完形の椀。釉調は濃緑、胎土は薄橙軟質で器肉は厚い。底面は糸切り痕の上に施釉。トチン痕をもつ。44号住居址出土。



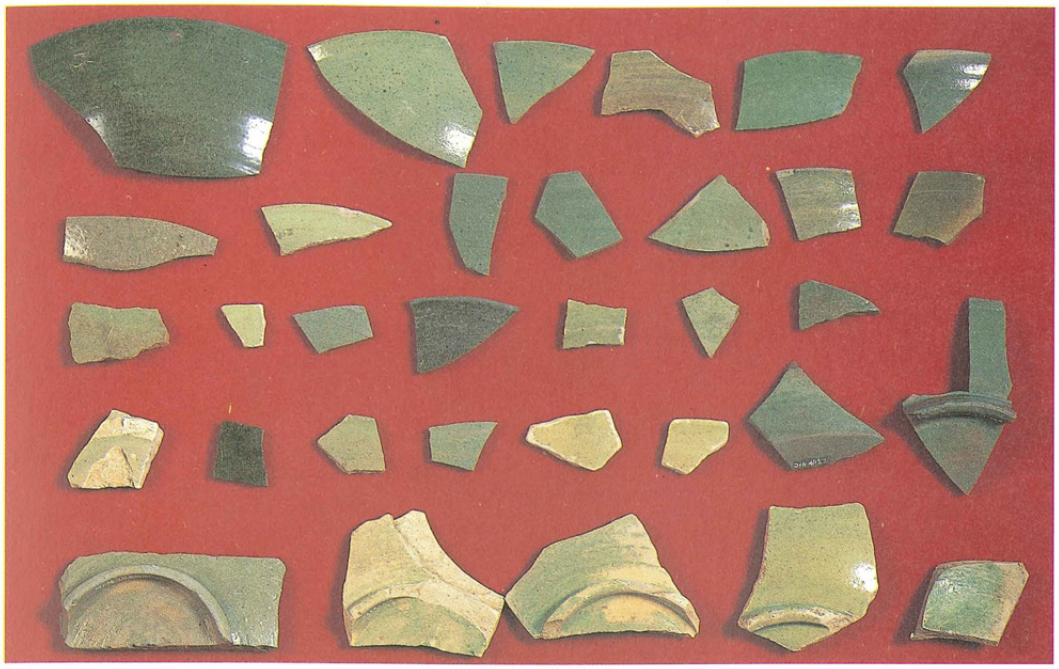
大形の瓶の底部破片と推定。内外全面に淡緑の緑釉が掛かるが一部で剥落する。胎土は硬質暗灰白色。内面のロクロ調整痕が顕著。46号住居址出土。



椀か皿の破片に穿孔したもの。補修孔か。釉は黄緑色で厚く、灰白色だが軟質な胎土も特徴的。30号住居址出土。



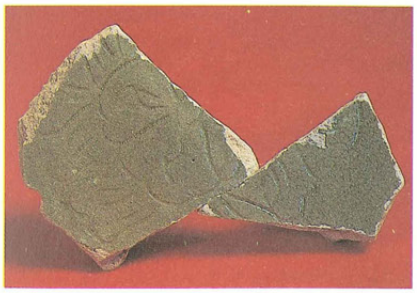
緑釉陶器実測図（1：4）



各種の緑釉陶器。いずれも椀・皿類の一部で、輪花も見られる。釉の色は草色から濃緑まで様々で胎土も橙色軟質のものから須恵器質のものまである。

緑釉陰刻花文陶

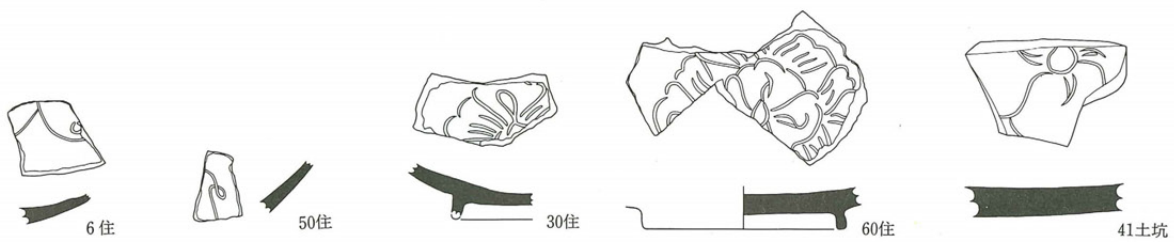
緑釉陶器の椀・皿類破片には、陰刻による花文が描かれているものが5点出土している。長野県内では緑釉陶器そのものの出土数が多くはないが、中でも陰刻花文陶の事例は特に少ない。松本市内に限れば、県町、北栗、三間沢川左岸などの遺跡からあわせて数点の出土があるに過ぎず、本遺跡からの出土品は最も充実しているといえよう。



椀か皿の見込み部で、二重に巡る花弁文の内側の花弁には蕊のみ、外側は脈のみが表現されている。釉は濃い草色で厚く、貫入が全面に見られる。胎土は灰白色でやや軟質。6号と60号住居址で出土、接合。

椀か皿の見込み部で、二重に巡る花弁文の外側の部分と推定。花弁には交互に蕊と脈が描かれる。淡緑色の釉は厚く光沢があり、全面に貫入がある。胎土は灰白色でやや軟質。30号住居址出土。

大形の椀か皿の見込み部中央。花弁文の中心の円、花弁と蕊が線刻されるが、作りは雑で稚拙。釉は透明から淡い草色を呈し、胎土は硬質灰白色。器肉が他の個体とは際立って厚い。41号土坑出土。



緑釉陰刻花文陶実測図（1：3）

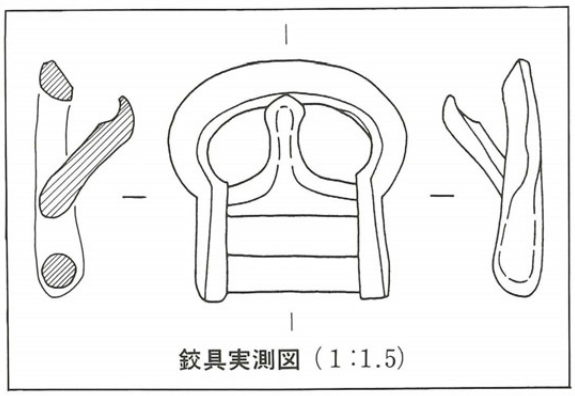
金属製品

刀子と鉄鏃　写真左側５本は刀子。各部を欠損しており、全形がわかるのは下段の一点のみである。刃部と、柄を差し込む茎（なかご）に分かれており、当時は木製の柄と鞘が付属していたと考えられる。現在のナイフに相当。

写真右側４本は鉄製の鏃（やじり）（矢の先）。右側２点は「雁又鏃」と呼ばれ、先端が二股に分かれる特殊なもの。この時代の鏃は対人戦闘用として大形のものが多く、右端のものは長さ17㎝、左端のものでも11㎝を測る。

銅製の鉸具（かこ）（バックル）

銙帯（ベルト）の留め金具。ベルトに通す差し金などは現代のものと構造が同じである。当時の高位の身分は銅や石の飾り（銙帯金具）を付けたベルトを着用したが、本遺跡にも有力者がいたのだろうか。25号住居址出土。



鉸具実測図（１:1.5）

土錘

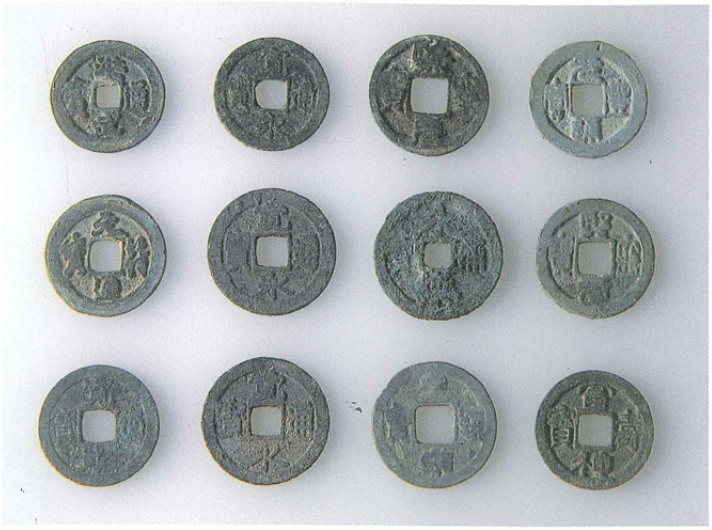
紡錘形をした土製品。２点出土している。紐を通す穴があり、一般に漁網の錘りと考えられている。この周辺での漁の存在を物語るのであろうか。70号住居址出土。

鞴（ふいご）の羽口

鍛冶に用いる土製の送風管。写真左側の羽口の先端は、炉からの被熱で溶解変色が著しい。約20点の出土を見たが、その大半は９号住居址と62号住居址から出土した。

銭貨

本調査では11～15世紀に中国で鋳造された輸入銭と、国産の富寿神宝、寛永通宝が出土している。このうちの半数は火葬墓などの墓址に伴っていたものであろう。



No.	出土地点	銭種	初鋳年
1	24住南東部	元豊通宝	1078
2	24住	熙寧元宝	1068
3	59住	富寿神宝	818
4	火葬墓2	永楽通宝	1408
5	〃	不明	
6	墓3 No.1	熙寧元宝	1068
7	No.2	不明	
8	No.3	元豊通宝	1078
9	36坑No.2	寛永通宝	1636
10	36坑半割東	寛永通宝	1636
11	P678 No.1	熙寧元宝	1068
12	P678 No.2	洪武通宝	1371
13	〃	元符通宝	1098
14	井戸際排土	寛永通宝	1636
15	〃	寛永通宝	1636
16	1地区排土	皇宋通宝	1038

小池遺跡出土銭貨一覧

富寿神宝

奈良～平安時代にかけて作られた皇朝十二銭のひとつ。平安初期の818年に鋳造。松本市内では2例目の出土。59号住居址出土。

No.	遺跡・遺構	発掘年	銭種	初鋳年	その他
1	下神・SK490	1985	萬年通宝	760	
2	〃・〃	〃	〃	〃	
3	〃・〃	〃	〃	〃	
4	〃・〃	〃	神功開宝	765	
5	〃・〃	〃	〃	〃	
6	〃・〃	〃	〃	〃	
7	〃・SK554	〃	萬年通宝	760	
8	〃・SD108	〃	神功開宝	765	
9	三間沢川左岸・16住	1987	富寿通宝	818	
10	〃・161住	1988	延喜通宝	907	数枚溶着
11	小池・59住	1990	富寿神宝	818	

松本市内出土皇朝十二銭一覧

松本市内出土の皇朝十二銭

左表に示すように、今回を含めて11例が出土しているにすぎない。対象範囲を松本平に広げても、塩尻市吉田川西遺跡SB159の富寿神宝1例が加わるだけである。ただし三間沢川左岸遺跡161号住居址では延喜通宝とみられる数枚が溶着しているので正確な枚数はわからない。これらを出土した遺跡はいずれも緑釉陶器の出土量が特に多かったり、また文献に現れる荘園と判明するなど、通常の集落とは明らかに異なっている。出土遺構は、下神遺跡では溝と土坑、他は竪穴住居址で、埋没の性格は一様ではない。銭種は4種類で、三間沢川左岸161号住居址例を除き、鋳造年が平安時代初期までの比較的古いものに集中する。銭貨の出土により、出土遺構の埋没年代の上限を区切ることができるが、伴出した土器から推定できる年代とは、吉田川西遺跡の例で約100年の隔たりがある。この点について本例や三間沢川左岸遺跡例では未検討。

調査のまとめ

1．大形建物址について

1・2号建物址は松本平では最大級、長野県下でも有数の規模を誇っており、おそらく一般住宅と同等に捉えることはできまい。周囲がすべて竪穴住居である点からみても、本遺跡の9世紀代集落の中ではきわめて特殊な存在であったと考えられる。このことは当該集落自体の特異性も示唆しよう。構造上からも、1号建物址は西側廂の柱穴列の外側に、さらに4個の柱穴が並ぶ特殊なものである。この部分は3×1間の孫廂と理解して復元図（表紙）を描いたが、類例があれば御教示を頂きたい。

2．出土遺物について

同時期の他の遺跡にくらべて、緑釉陶器、墨書土器の出土量が多いことが最大の特徴である。また鉄器も多く、金属製品や銭貨など貴重品の出土もある。これは塩尻市吉田川西、松本市三間沢川左岸遺跡の出土遺物の様相と類似しており、珍しい遺物の多出する集落遺跡のひとつの傾向である。

3．古代集落について

古代の遺構としては、最終的に79軒の竪穴住居址、5棟の建物址と多数の土坑、溝などが発見された訳だが（3頁一覧表参照）、遺構分布範囲の東・西限が未確認であることを考慮に入れると、遺跡全体では竪穴住居址だけでも100軒を越える存在が確実であろう。しかし8世紀中頃～10世紀前半の約2世紀間にわたることが判明しており、一時期に存在していた住居の数は最大でも20～30軒程度と推定される。しかも、この2世紀間の変化は一様ではない。8世紀代は遺構の分布が薄く、9世紀の後半に最も遺構が増える。集落の最盛期である。ところが、10世紀に入ると衰退が急速に進んだようで、10世紀後半代には遺構はほとんどなくなり、古代の本集落は終焉を迎える。前述の大形建物址が建てられたのは繁栄前夜の9世紀前半であり、土壙墓である82号土坑（9頁参照）は終末期の10世紀中頃以降に設けられたことになる。

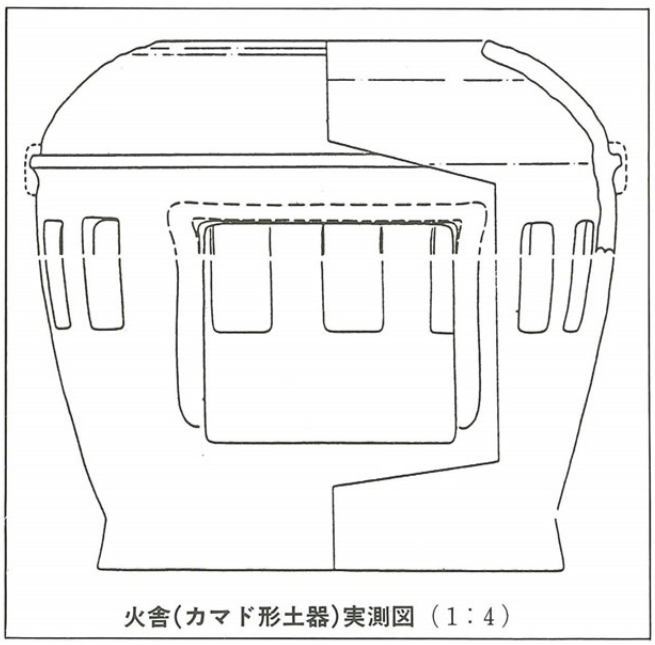
4．小池遺跡の背景

本集落の出現や繁栄の背景は何であろうか。遺跡立地は山麓の西向き斜面にあたり、出土遺物が物語る豊かな経済力を支えるような格好の水田域を特定するのは困難である。主な生活基盤として水田経営以外を想定することが必要なのかもしれない。

本遺跡を巡る古代から近世の歴史的環境は前述（2頁）のとおりだが、古代に関わる項目では、以下のことが挙げられる。

良田郷（倭名類聚鈔）
東山道と覚志の駅（延喜式）
埴原の牧（延喜式）
田河造の賜姓（続日本紀）

このなかの、牧、あるいは駅に関連して本集落が栄えたのなら、農業経営基盤の希薄さも納得できよう。しかし、現在までの出土遺物の整理状況では、残念ながら発掘資料の中ににそれを直接に裏付けるようなものはまったく見出し得ていない。



火舎（カマド形土器）実測図（1：4）

火舎（かしゃ）（17号住居址出土）

口径20㎝、最大径36㎝を測る火舎（カマド形土器）の大破片。元来は緑釉陶器の器種であり、土師器で模倣した在地産のものであろう。部分的に黒色研磨の器面が残り、本来は黒色土器と推定する。器形の復元は畿内出土の緑釉製品を参考にした。胴部の1か所には周囲に反り出しを有する大きな開口部があり、長方形の透かし窓がそれ以外の胴部に等間隔で並ぶ。肩には凸帯が全周し、一部に耳状突起が付されていた痕がある。珍しい器種で、長野県内初の発見。

小池遺跡と周辺の航空写真

中央に縦に細長く調査地が写る。写真は上方が北で、北東部一帯に並ぶ住宅群は寿台団地。北辺中央の森は小池神社。調査地南西の池は小池堤。その南を西北西に流れるのが塩沢川である。一帯は東から西（写真右から左）へ緩く傾斜する地形で、田畑の境界も等高線にそって南北に長い。平成３年１月の撮影で、日陰には雪が残り、池に氷が張っている。

遺　跡　名　小池遺跡
遺跡台帳No.　松本市64-246（長野県市町村遺跡一覧表）
　　松本市223（長野県史、名称は「神社付近」）
調　査　地　長野県松本市大字寿小池字東1034番他
調査期間　平成２年９月10日～12月17日
調査面積　9300㎡
調査原因　寿小池地区土地区画整理事業
調査主体　松本市教育委員会

小池遺跡
－平安時代集落址の発掘調査－
印刷　平成３年３月20日
発行　平成３年３月30日
編集・発行　松本市教育委員会
〒390　松本市丸の内３－７
TEL　0263（34）3000
印　刷　精美堂印刷株式会社